

2. 教員の自著紹介

河西秀哉『平成の天皇と戦後日本』人文書院

NHKが5年ごとに行っている「日本人の意識」調査は、同じ質問・方法で世論調査を行っており、そのなかのひとつに、「あなたは天皇に対して、現在、どのような感じをもっていますか」という質問がある。回答リストには「尊敬の念をもっている」「好感をもっている」「特に何とも感じていない」「反感をもっている」などの項目があり、このなかから16歳以上5400人の対象者が回答を選択する。直近の調査は2018年6月から7月にかけて行われた。平成30年という、この元号が終わりを迎えつつあった時期である。

その結果は、「尊敬」が41%、「好感」が36%、「何とも感じず」が22%、「反感」が0%で、8割近い人々が天皇に対して好印象を持っていた。1973年に始まった調査以来、「尊敬」は最も高く、逆に「何とも感じず」は最も低い数値である。昭和の時代、「何とも感じず」は常に5割近い数値を示しており、一方で「尊敬」は徐々に減少していた。それが平成に入った時に「好感」が上昇、2003年からは「尊敬」も次第に上がりはじめ、現在に至った。これは、いわゆる「平成流」と呼ばれる、象徴天皇制のあり方に大きく関係しているのではないかと。こうした疑問から、そのあゆみを歴史的に検討してみたのが本書である。

本書の特徴は、2つあると考えている。第一に、昭和後半から平成の歴史を検討したことである。現代史といえども、現在に近い時期までを研究対象とすることはそれほど多くはない。それは、研究者自身がその時期を生きてきたこともあり、自らの記憶が客観性を阻害してしまう可能性があるためだろう。しかし、本書ではあえてそれを恐れずに挑戦してみた。そうすると、私たちは意外に近年の出来事を忘れていたことに気がついた。象徴天皇制が形成される過程は、多くの先行研究によって解明されており、私自身もそれによって学んできた。ところが、「平成流」をめぐる様々な出来事があったにもかかわらず、そのことについては未だ研究対象になっていなかったこともあり、その意味を問うことも、場合によってはその出来事存在すら忘却されて現在が語られているケースもあった。たとえば、平成の初期、美智子皇后へのバッシングが相次いだ。いわゆる「平成流」への反発から、皇后が批判の対象になったのである。ところが、現在の「尊敬」が高い状況からではそれが想像できない。2016年の退位をめぐる政府の有識者会議で「平成流」を批判した人々が突如現れたように見えたが、そこには美智子皇后バッシングの経験が根底にあった。

第二に、マスメディアでの報道と天皇・皇后の言説の検討を両方重視したことである。1959年の明仁皇太子と美智子妃の結婚は、その時期に出版ラッシュであった女性週刊誌を含め、新聞・雑誌、そしてテレビなどのマスメディアによって大きく取りあげられ、いわゆるミッチー・ブームが起こった。こうした史資料を扱うこと自体、従来の歴史学ではあまりなかったかもしれない。とはいえ、国立国会図書館や大宅壮一文庫に通い、週刊誌などのマスメディアから皇室関係の記事を探して見てみると、記事内容の真偽はともかく、社会の求める雰囲気のようなものが見えてきた。そこには、理想的な夫婦像として彼らを求める人々の意識があった。とはいえ、それが長続きしなかったこともわかってきた。熱狂的な報道が収まった後、皇太子と皇太子妃は「象徴」をめぐる様々な模索を繰り返していく。そして、大きくは報道されなくなるが、記者会見などの場でその模索の意味に関する発言を積極的に繰り返した。彼らの言説を検討していくと、後に「平成流」と呼ばれる彼らの行動の原点が見えてくる。さらに平成のマスメディアにおける報道を追っていくと、彼らの行動が平成の中盤から後半になって評価されていく様子もわかった。社会のあり方の変化が、彼らの行動や言説への見方をも変化させたのである。マスメディアでの報道と天皇・皇后の言説は関連し合いつながりながら、「平成流」の象徴天皇制のあり方を構築していった。本書ではその過程を描き出した。

とはいえ、今読み返すと、本書の記述はまだまだ素描にすぎないようにも感じる。今後はより丁寧に史資料を検討することで、現在の象徴天皇制に至る歴史的過程を明らかにしたい。